

今日は、縁起についてのお話です。縁起と言いますと、良いこと、悪いことが起こる兆しきざとして「縁起がいい、縁起が悪い」という言葉があり、偶然自分の身の回りに起きた出来事を原因として、将来自分の身の回りに起きる結果を案じるように用いる事が多くあります。

しかしながら、もともと仏教を通じてもたらされた「縁起」には、より私たちの生き方に密接に結びつく、違う意味が込められていました。

仏教を開かれたお釈迦様が苦行くぎょうを経て、菩提樹ぼだいじゆのもとで開かれたというお悟りは、仏教徒である私たちにとって大切な教えとなるものです。そのお悟りは自らの行いによって「縁起」の道理を明らかにする教えであったと言われてしています。その「縁起」の教えとは自らの行いとしての原因と、その結果としてのお悟り。つまり「因果」の道理であるとも言えるのです。

この因果の道理を道元どうげん禅師は、『正法眼蔵しょうぼうげんそう』「深信因果しんしんいんが」の巻において、原因を修め結果を感じることを説く「修因感果しゆいんかんか」と示されています。

「修因しゆいん」とは、私たちが因いんをなす主人公であることを言います。何かの原因とは、私たちのために他の誰かが行うことではなく、今、他ならぬ私こそが、何を行いとして修めることができるのかを念頭に置き、実践をしていく事が大切であると私たちに教えてくれます。

同じ様に、結果かんを感じる「感果かんか」についても私たちが主人公なのです。その結果としてよそから何かの出来事が起こった時、私たち自身が主人公としてどの様に感じるのかが大切なのです。

例えば「ありがとう」と人に言うと自分もうれしくなります、うれしく感じることでもっと相手の為になることをしようと思えます。

この様に、私たちの生活の中にも原因を修め結果を感じる、つまり「修因感果」が当てはまるのではないのでしょうか？「縁起」の教えは「修因感果しゆいんかんか」として、日常にあって今、何をなすのかを私たちに問いかけているのです。

